5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

47

その他の国・地域の今後

アジアの中華系に期待

東南アジアで日本のリンゴを買ってくれる富裕層は、華僑と呼ばれる中華系が占めていると紹介してきた。一般に、中国本土以外で、国籍が中国にある中国系人口を「華僑」、国籍が居住国にある中国系人口を「華人」と呼ぶ。

では、各国の華僑・華人の人口比率はどうなっているかというと、必ずしも各国が同じ基準で調査していなかったり、そもそも調査がなかったりして、明確な統計はない。最終的には研究者などの推計に頼るしかないようだ。

その中で、ジェトロ・アジア経済研究所の報告が分かりやすいデータを提供しているので、引用させていただくことにした。

それによると、東南アジア諸国（中国、台湾、香港を除く）の総人口に占める華人（華僑も含む）の割合が高い国は、シンガポール（52・9％）、マレーシア（23・6％）、タイ（11・2％）、ブルネイ（9・7％）で、それ以外は1割未満。人口そのものでは、インドネシア（812万人）、タイ（751万人）、マレーシア（678万人）、シンガポール（283万人）などとなっており、東南アジア全体で約3千万人と言われている。県の輸出拡大戦略に設定されている輸出対象国にほぼ網羅されている国々だ。

【写真上】シンガポールの日系百貨店で売られていた1個4千円の世界一【同下】1個3200円のふじ。航空便の葉とらずと紹介している＝1月（黄孝春・弘前大学教授提供）

この中で、注目したいのが、シンガポールだ。香港と同様に、リンゴの植物検疫はなく、関税も無税だ。1月に当地を調査した弘前大学の黄孝春教授によると、日本の卸売市場経由の流通も目立ち、日本の各産地のリンゴが高級百貨店に並んでおり、中には1個4千円の世界一や3200円のふじもあり、これまで各国で見た中で最高値だと興奮気味に教えてくれた。

シンガポールは1人当たり名目GDPが5万3千ドルで日本の3万2千ドルをはるかに上回る。人口は香港の700万人と同程度の600万人で、香港より通過人口は少ないが、リンゴは輸入果物のトップだ。簡単に高単価のリンゴが売れるわけではないだろうが、今後の拡大も期待できる。

いずれにしても、リンゴの嗜好が日本人に近く、果物を供物や贈答に使う習慣を持つアジアの中華系に向けての輸出はこれからも大いに期待できる。

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）